

## 国内経済情勢

### 概 観

輸出が好調を続けているほか国内最終需要も全体として緩やかながら回復傾向をたどっており、このため鉱工業生産、出荷とも引続き増加し、製品在庫調整が一段と進捗した。

この間商品市況は騰勢がやや鈍化したものの上伸基調にあり、卸売物価は引続き上昇し、4月の消費者物価も季節商品の高騰などから大幅上昇となった。

金融面では、企業の資金需要は落着いている一方、銀行券、マネーサプライの伸び率が徐々に高まっている。

3月の国際収支は、貿易収支が既往最高の黒字を記録したため、総合収支でも前月に続いて大幅黒字となった。

#### 生産、出荷とも引続き増加

3月の鉱工業生産(季節調整済み、速報)は、前月比+1.9%と4か月連続して増加した(前年同月比+14.4%、1～3月の前期比+4.2%)。業種別にみると、一般機械、石油などは反動減を示したが、乗用車、電気機械、非鉄がかなりの増加をみたほか、鉄鋼、繊維なども引続き増加した。

鉱工業出荷(季節調整済み、速報)は、前月比+3.2%と前月の大幅増加に続いてかなりの伸びを示した(前年同月比+15.0%、1～3月の前期比+4.4%)。これは一般機械が前月大幅増加のあ

と減少となったものの、鉄鋼、弱電製品、自動車などが輸出の伸びもあってかなりの増加を続けたほか、窯業、化学、紙パルプなども増加したためである。

この間生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は、前月比-2.7%と前月(同-1.2%)に続いてかなりの減少となり、この結果生産者製品在庫率(45年=100)は123.5(前月130.9)と2か月連続して大幅の低下をみた。業種別には、鉄鋼の在庫が8か月ぶりに減少したほか、金属製品、紙パルプなどこれまで調整の遅れていた投資財・生産財関連の業種でも製品在庫の調整が急速に進捗している。

3月の設備投資関連指標の動きをみると、一般資本財出荷(季節調整済み、速報)は、前月増加した大型受注機械や土木建設機械の反動減が響いて前月比-0.1%となった(1～3月では前期比+11.2%)。

機械受注額(船舶を除く民需、季節調整済み)は、電力、鉄鋼向け的大幅増加を主因に前月比+19.6%と引続き増加した。

一方、建設工事受注額(民間産業分、季節調整済み、速報)は前月大幅増加のあと微減(前月比-1.1%)となった。

2月の新設住宅着工戸数(季節調整済み)は、住宅金融公庫の50年度下期分融資が峠を越えたため、前月比-6.6%と3か月ぶりに減少した(前年同月比+30.1%)。

3月の全国百貨店売上高(季節調整済み、速報)

は、前月増加(うるう年の影響等)の反動のほか、天候不順の影響もあって前月比 -3.9%と減少した(1~3月では前期比 +5.3%)。4月の乗用車新車登録台数(季節調整済み)は前月大幅増加の反動から前月比 -5.4%と減少した。

3月の労働関係指標の動きをみると、常用雇用(季節調整済み)はわずかながら再び減少したが、有効求人倍率(同)は0.68倍(前月0.62倍)と引続き上昇し、所定外労働時間(同)も製造業を中心に増加を続けた。

### 消費者物価は大幅上昇

4月の商品市況は、非鉄が海外高などから急伸し、鋼板、天然糸、一部合成樹脂等が値上りした反面、条鋼類、セメント等小反落したものもあり、総じて騰勢は従来に比べやや鈍化したが続き上伸基調にある。

卸売物価は、3月に前月比 +0.6%の上昇となったあと、4月に入ってから、紙パルプなどが軟化したものの、非鉄をはじめ繊維、窯業製品などの値上りから、上旬前旬比 +0.2%、中旬同 +0.1%と上昇を続けた(中旬の前年同月比 +4.8%)。

一方4月の消費者物価(東京)は、野菜等の季節商品の急反騰に加えて授業料、医療費の引上げ等があったため、前月比 +2.7%と大幅の上昇を示した(前年同月比 +10.2%、なお季節商品を除く総合でも前月比 +1.5%の上昇)。

### マネーサプライの増勢続く

4月の金融市場をみると、銀行券は933億円の還収超(前年同444億円)となったが、財政資金は50年度分の公共事業費等の出納整理に伴う支払がかさんだものの、国債発行が引続き多額に上ったほか、租税収入が約1年ぶりに前年を上回ったこ

となどもあって、総収支じりでは12,252億円の払超となり前年の払超額(同14,764億円)を下回った。この結果、その他勘定を合わせた月中の資金余剰額は12,711億円(前年同14,678億円)となり、日本銀行は主として買入手形の期日落ちによってこれを調整した。

この間、コール・手形売買市場では、季節的な資金需給緩和期入りを映じて4月1日からコールレートは0.25%、手形売買レートは0.5%それぞれ低下したあと、通月平穩裡に推移した(低下後のコール無条件もの出し手レート6.75%、手形買い手レート7.25%)。

4月の銀行券平均発行高の前年比伸び率は+11.5%と前月(同+10.4%)を上回り、一方3月のマネーサプライ(M<sub>2</sub>、平残)は前年同月比+15.7%と財政支払増等を映じた預金通貨の増加を中心に引続き伸び率を高めた(前月同+15.3%)。

3月の全国銀行貸出は、前月末休日による高どまりの影響もあって、月中11,442億円増と増加額はほぼ前年(11,158億円増)並みにとどまり、月末残高の前年比伸び率は+11.7%と前月(+11.9%)に比べやや低下した。

この間企業の資金需要をみると、住宅・耐久消費財関連企業の増加運転資金、流通関係の設備資金などが一部にみられはじめているものの、大勢としては在庫調整の進捗、輸出の好調持続、年度末の財政支払増加などを映じて引続き鎮静基調にある。これに対し金融機関の融資態度は総じて弾力的であるため、企業の資金繰りはさらに緩和感を強めている。

3月の全国銀行貸出約定平均金利は月中0.048%低下し、昨年4月以降の通算低下幅は1.105%(公定歩合に対する追随率44.2%、短期金利のみ

では73.9%)となった。

4月の公社債市況は、月初都市銀行等の売りがやや強まったため幾分軟化したあと月央以降は買い手筋の値ごろ買いの動きなどもあって保合い商状が続けた。この間株式市況は前月の地合いをうけて月央まで整理商状が続いたが、その後はニューヨーク株価の堅調などから反発し、月末には旧ダウ4,656円(前月末4,596円)となった。

#### 貿易収支は既往最高の黒字

3月の国際収支は、貿易収支が輸出の好伸持続と輸入の落着きから既往最高の黒字(1,357百万ドル、季節調整後では、1,494百万ドル)を記録したため、長期資本収支は対外直接投資の増加などから流出超に転じたものの、総合収支でも654百万ドルの黒字と2か月連続(前月619百万ドル)して大幅黒字となった。

3月の輸出(通関ベース、季節調整済み)は、3か月連続増加のあと前月比+9.1%の著増となった(1～3月の前期比は+15.7%)。これには船舶引渡しの集中もあるが、自動車、弱電製品の好調

が続いているほか、鉄鋼、繊維、化学製品なども増加したためである。概して数量の増加が主体ながら輸出価格もこのところ持直しており、地域別には、米国向けがさらに一段と伸長したほかその他地域向けも総じて増勢を持続した。

他方3月の輸入(通関ベース、季節調整済み)は、前月比-1.1%と小幅ながら引続き減少した。もっともこれは原油の反動減が主因で、食料品、繊維・非鉄原料などはいずれも増加となった。

4月のインターバンク米ドル直物中心相場は、月初外銀の円転換進捗や海外の円需要などから軟化を続け、上旬末には298円となったが、その後は輸入決済需要、為銀の手元補充買い等により需給が小締り気味となったため相場も強含みとなり、結局299円40銭(前月末299円70銭)で越月した。

4月の外貨準備高は月中755百万ドルの大幅増加を示し、月末残高は14,937百万ドルとなった。

(昭和51年5月11日)